

<今回>229回目 2018年3月9(金)16時~18時 601号室

読書は9冊目「邪馬壹国の証明」 p85音(6)版本への無関心は何をもたらしたか。

<前回>227回目(18-2-26) 出席者9名

資料(18-02-26-1)前回のまとめ(清水)

-2)郭務棕最後の訪問(清水)

-3)碾愷について(高山)

A 報告

前回誤って16時からと書いていました。遅刻された方にはお詫び申し上げます。また前回2月2日は大雪の予報のため急きょ中止しました。ご迷惑をおかけしました。

懇親会7名 津多屋14933円(7・2000) -933円

B 資料 -1)前回のまとめ、p71からp78までまとめをすべきだが読んでいないと思って省いてしまった。申し訳ない。

-2)5年前の論文だが、言いたかったところは甲冑弓矢は数字がなくてただ賜う(自国中心主義)となっており、それに反して絹、布、錦は有効数字4桁の端数まで書いていること。それを武装解除で数量が多すぎて書けなかったのか。絹等は各地域(郡)に割り当てた戦利品を厳密に記録して確実な履行を唐(郭務棕)に印象付けた。3)碾愷の資料は山田宗睦氏の講座に時の配布資料で筑紫観世音寺にあるので、よく見てきてほしいというもの。石臼である。

C 読書「邪馬壹国の証明」のp78 音あて中心主義の因襲(その1) から。

1)一言でいえば邪馬台国の研究史は「音あて」中心主義の歴史であった。松下見林の近畿天皇家中心主義。新井白石の「外国之事調書」において筑後山門を比定した九州説の嚆矢。これらは三國志の邪馬壹国を捨て後漢書の邪馬台国を取った理由は天皇家の本拠たる大和と結合せんがためである。批判精神の欠如である。

2)星野恒以下早々たる学者たちが山門という改定同音地名にひいていかれたのは解しがたい。方法論上の一大奇怪事を真に疑いとする人を未だ見ないのは近代の史学研究者として重大な怠慢ではないか。(邪馬臺の略字、邪馬台はヤマトと読める、読みたいの一点にある。それは学問的かどうかを指摘している)

3)音あて中心主義の因襲について(その2) 宮崎康平「まぼろしの邪馬台国」は周辺の21か国の比定を行って。その中心に邪馬台国を当てようとする氏の独創があった。内藤湖南は逆に中心国名ヤマトを決めて近畿中心の東西にあとからの検証として21か国の比定を行った。(宮崎は郡、字単位。湖南は県、郡単位)。記紀に出現する人名との比定に齟齬は著しかった。一例卑弥呼をヒメコと読む。弥の字をメと読む事例はない、投馬国の官はメナリになる。

4)その最たるものが埼玉稻荷山鉄剣銘の読解である。獲加多支鹵をワカタケルと読んで雄略天皇に当てた。それは齟齬の連鎖を生んでいる。雄略の宮居は斯鬼宮ではない。長谷の朝倉宮である。佐治天下は王者が女性か幼少で実際上の政治を為しえないときに親縁の実力者が実際の統治権を執行するときのみ用いる、政治術語だ。(実際には周公旦しかいない)。したがって田舎者の大風呂敷として問題を回避せざるを得ない。(同じく中国は遠国で日本の事情に疎いという遁辞が松下見林にある)。

5)p71から78までの要約 後漢書の邪馬台国をとったとの主張は三國志の方が内容は同時代史料として信憑性が高いと言いながら国名だけ後漢書から臺を取っている。邪馬台の臺はトと読めるかの検証がない。夷蕃の国名にはトは別の文字類が当てられている(例示多く略)。臺は5世紀後漢書の書かれた時の文字、3世紀の三國志は壹である。当時臺は神聖文字で夷蕃の国名には使われていない。(范曄何故臺を使ったのか、新しい史料を見たのか不明)

次回日程 18-3-23(金) 15時から18時 601会議室

ー4ー2(月) 15時から18時 603号室